

## 暖地におけるステビアの栽培法に関する研究

(第2報) 栽植密度について

村社久米夫・梶本 明・江藤博六

(宮崎県総合農業試験場)

第1報では本県における適応性について報告したが、本報ではその特性に見合った適正な栽植密度について生育収量性の面から検討し一応の試験結果を得たので報告する。

## 1. 試験方法

昭和49年度に農事試験場畑作部から入手した種子を、ペーパーポットに6月17日播種し育苗を行なった。定植時期は、7月16日で30日苗を使用し、畦巾60cm、株間10、15、20、25cmで実施した。供試地は、場内火山灰土壌(S.L)で行ない、施肥量は(kg/a)、堆肥120、N0.9、P0.6、K1.0の全量元肥とした。ただし、50年、51年は堆肥の他は、N0.5、P0.8、K0.8とし追肥に、N0.2を刈取後に施用した。この他越冬株をみるため翌春の芽立ち終了後再生株の調査を行なった。

## 2. 試験結果および考察

第1表の年次別の乾物重についてみると、初年株の葉身重は株間10、15cmの密植が粗植の20、25cmに対して多収を示し密度差の影響が大きくあらわれた。2年株になると、葉身、莖枝、花蕾ともに初年株に対して、25~38%程度の多収を示し特に密植の株間10cm区は、42.6kgの

多収をあげた。しかし密度間の差は比較的少なくあらわれ、初年株程の収量差はみられなかった。この中で花蕾の量が他の区に比較して多くなかったが、これは2回刈による影響ではないかと思われる。3年株でも葉身重は密植の10、15cm区が依然として他の粗植区よりも多く、45~46kgの多収を示した。

一方再生株率の調査結果からみると、昭50、同51の両年ともに再生株率は栽植密度間の差は余りみられず大体70%前後にとどまった。しかし枯死株率は両年とも粗植の20、25cm区が9~12%であるのに対し、密植である10、15cm区は16~18%でやや高かった。原因については不明であるが、株間の競合による根系の露出や、個体当りの根の張り方のちがいがいなどが考えられる。

以上の試験結果から葉身重は、3年次を通じ株間は、10~15cmの密植が多収を示したことから適当な栽植本数は実生苗では粗植するよりも、ある程度密植する方が良く、株間は10~15cmでアール当り、1,000株以上確保する必要がある。ただ年間の収穫回数や土壌肥沃度と栽植密度、あるいは再生株率の問題については今後さらに検討を要する。

第1表 年次別乾物重の変化および再生株率

項目 区別	年次別乾物重 (kg/a)												再生株率 (%)			
	初年株 (昭49年10月1回刈)				2年株 (昭50年9月、11月2回刈)				3年株 (昭51年8月1回刈)				昭50年4月 3日調査		昭51年4月 1日調査	
	葉身	莖枝	花蕾	計	葉身	莖枝	花蕾	計	葉身	莖枝	花蕾	計	再生株率	枯死率	再生株率	枯死率
株間 10	13.7	33.0	11.5	58.2	42.6	95.7	16.2	154.5	45.3	90.0	2.5	137.8	83.5	16.5	84.0	16.0
〃 15	10.0	21.6	7.2	38.8	38.1	82.5	10.4	131.0	46.4	99.7	2.6	148.7	81.8	18.2	83.8	16.2
〃 20	8.8	19.5	6.2	34.5	36.0	86.1	8.9	131.0	35.2	72.5	1.2	108.9	89.4	10.6	87.6	12.4
〃 25	7.7	18.5	6.7	32.9	35.5	82.5	9.4	127.4	38.7	78.0	2.7	119.4	90.8	9.2	88.2	11.8